

Title	「とする」構文についての覚書
Author(s)	岩男, 考哲
Citation	日本語・日本文化. 2007, 33, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8061
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈研究論文〉

「とする」構文についての覚書¹⁾

岩男 考哲

1. はじめに

本稿は、下記の(1)–(4)のような、引用構文の主節述語に軽動詞「する」が生起する表現(以下、便宜上これらを一括して「とする」構文と呼ぶ)が、統語的に幾つかの下位類に分類できること、そして、その統語的な分類が従来の研究において指摘されてきた「とする」構文の種々の意味に対応することを示すものである。

- (1) 東芝との関係について、GE エナジー原子力事業部門のルドルフ・ピラ・アジア担当プレジデントは「次世代原発については東芝と日立の両方と契約が残っており、それは尊重する」とする一方、「東芝との間で(日立と)同じように合意する予定はない」と述べ、日立を優先的に扱う姿勢を鮮明にした。
(asahi.com)
- (2) K氏が犯人だとすると、犯行時刻の午後8時にはそこにいたはずだ。しかし、午後7時から10時までK氏がスナックにいたことを多くの人が証言している。
(『考えることの科学』市川伸一)
- (3) 福岡での事故以降、飲酒運転をなくそうとする動きが広がっている。悲惨な出来事を二度と起こさないよう、社会全体が重く受け止めるべきだ。
(毎日新聞)
- (4) 作家としての親の苦しみが少しずつ分るようになったと同時に、数学者としての私の苦しみを相対化することが出来るようになった。
(『数学者の言葉では』藤原正彦)

2. 先行研究

本稿が「とする」構文と呼ぶ表現について言及した研究は幾つかあるが、ここでは、それらの中でも特に「とする」構文の意味・機能的な側面に言及したものをとりあげる²⁾。

以下でこれらの先行研究が「とする」構文の意味・機能について言及している部分について概観していく。

2.1 〈仮定条件〉〈近未来〉

まずは、三上章の分析を概観する。これは本研究同様、引用研究の枠組みの中で「とする」について(主に「とすれば」という形式について)考察したものである。ただし、「とする」を詳しく考察したというよりも他の引用表現、具体的には「と言う」「と思う」と比べた時に「とする」という形式はどういった性格のものかといった点について簡単に触れているのみである。あくまでも、考察の中心は「とすれば」であるものの、その一部において、「とする」にも触れている。その中で三上は、「とすれば」の用法を「非常に狭い」とし、次のように述べる³⁾。

to *suleba* という impersonal な仮定条件を表わすのがおもであって、他の活用形の場合でもすぐに仮定へ引継がれる。

カリニ A ハ B ダ to *seyo*, *siyo*, *sulu*. ソウ *suleba*……

また、「しようとする」を「近未来」を表わすものとし、「近未来を表わす“シヨウ to スル”は慣用表現であるから、引用形式とは別の複合的な用言と見なすべきである」と述べる⁴⁾。

以上の考察をまとめると、「とすれば(とせよ/としよう/とする)」は〈仮定条件〉という意味を表わし、「しようとする」は〈近未来〉という意味を表わすということになる。

2.2 発話動詞・思考動詞との接近

次に益岡隆志による分析を概観する。これは条件表現についての研究であり、

特に「とすれば」に注目したものである。しかし「トスレバ形式の文法的な意味を明らかにするには、『とする』がどのような文法的な意味を表わすのかを考えなければならない」とし⁵⁾、その中で次のように述べる⁶⁾。

「する」は引用標識の「と」に後続する場合、引用動詞の性格を帯びることになる。引用動詞の典型が「言う」に代表される発話動詞「と思う」に代表される思考動詞であることから、「とする」は「と言う」のような発話の引用の意味と「と思う」のような思考の引用の意味を表わす、ということが予測される。

このように、この研究も三上同様、引用構文との関係の中で「とする」を捉えようとするものである点において、本稿と立場を等しくする。その中で「とする」の「する」に発話動詞・思考動詞に近い意味を見出している。

以上、本稿が「とする」構文と呼ぶ表現の意味的・機能的側面に何らかの形で言及している先行研究を概観した。これらの研究をまとめると、1)「とする」構文と引用構文との間に何らかの関わりを見出している、2)「条件・仮定」とでも呼ぶべき意味を見出している、3)「近未来」という意味を見出している、となる。

3. 様々な「とする」構文

本節では、先に見た「とする」構文が、統語的に幾つかの下位類へと分類できることを示す。

3.1 タイプ1

まず、一つ目のタイプとして、(1)を含んだ以下のようなものが挙げられる⁷⁾。

- (5) 海外のメディアでは、フィガロ紙は「日本はキレル? 伝統に亀裂が? 川久保はそう言っているように見える」。スタイル・ドット・コムは「安倍晋三が新首相に選ばれ日本が微妙な転換期にある今、あの赤い丸に注目せざるを得ない」として、「彼女は自身が思う純粋な日本の美をあえて表明した」と評した。
(asahi.com)

- (6) 合併に伴う選挙で初当選した佐賀市の秀島敏行市長が今年1月、3町に合併の意欲を打診。3町側も「07年度のできるだけ早い時期に合併したい」とし、急ピッチで協議を重ねてきた。(YOMIURI ONLINE)

2.2の先行研究において『とする』は『と言う』のような発話の引用の意味と『と思う』のような思考の引用の意味を表わす、ということが予測される」と言及された「とする」構文は、このタイプのものであろう。

以下、このタイプの「とする」構文について観察を行う。

(i) テキストタイプ

まず始めに、出現するテキストタイプについて触れておく⁸⁾。今回の調査において、このタイプの「とする」構文の出現は新聞に限られた⁹⁾。

(ii) 引用文にどれだけ表現可能か

本稿では「とする」を元は引用標識の「と」に軽動詞「する」が後接して生じたものと捉える。つまり「とする」とは、引用構文における述部の動詞が「言う」等具体的に何らかの発話を表すものではなく「する」という軽動詞をとったものと捉えることが出来る。

そこでまずは、このタイプの「とする」構文を引用表現としての性質という観点から分類する。その場合、本研究が重要視するのは、「とする」構文の引用表現としての本分という観点である。つまり、引用構文の本分を、所与の言葉を再現する(或いは、再現したかのように示す)こととするならば(これは先行研究においても概ね認められている)、その典型的なものは、どのような表現でも再現し得るものでなければなるまい。

そこで本研究では、意味的階層構造という観点から当該の構文がどれだけの表現を表わし得るかを考察していきたい。意味的階層構造とは、日本語の文を4つの意味的な階層から成立するものと捉える立場である。日本語の文を意味的な階層から捉える立場とは、詳細は割愛するが、日本語の文が「一般事態の階層」、「個別事態の階層」、「判断の階層」、「発話態度の階層」という4つの階層から成り立つと捉える立場をさす¹⁰⁾。この立場から考えると、典型的な引用構文であれば、「一般事態の階層」から「発話態度の階層」まで全ての階層を再現できることになるし、再現できる表現にある種の制限が生じると、それは典型的な引用構文からは

外れたもの(引用構文の本分は果たせないもの)だということになる。

では、この観点から上記のタイプの「とする」構文の引用文を見てみることにする。すると、(5) (6) からも明らかなように、このタイプの「とする」の引用文には、「ざるを得ない」や「たい」といった「価値判断」「願望」に関わる形式が生起可能であることが分かる。これらは、先ほどの階層で言うと、「判断の階層」に位置する要素である¹¹⁾。

また、今のところ実例は見つかっていないが、これが「発話態度の階層」となっても問題は無いように思われる¹²⁾。

- (5') スタイル・ドット・コムは「安倍晋三が新首相に選ばれ日本が微妙な転換期にある今、あの赤い丸に注目せざるを得ません」として、(略)。
- (6') 3町側も「07年度のできるだけ早い時期に合併します」とし、急ピッチで協議を重ねてきた。

(iii) 「する」の動詞らしさ

次に、このタイプの「とする」の(特に「する」の)動詞としての性質について考えてみたい。

まず、「する」の動作主について。このタイプの「とする」は「する」の動作主が特定可能である。例えば、(5)の動作主は「スタイル・ドット・コム」であり、そして(6)の動作主は「3町側」である。

また、「する」自体もテイル形・タ形と活用することができ、動詞としての性質を保持していると言える。

- (7) 弁護団長の中村誠也弁護士は「不正改造が容易にできることが製品の欠陥にあたる。欠陥を長年放置してきた責任を法廷の場で追及していく」としている。(asahi.com)
- (8) ヤクルト球団は16日午前、多菊善和球団社長が記者会見し、「岩村君にはレギュラーとして日本と同じような数字を上げて欲しい」と話した。落札金額は公表しなかったが、「予想より高かった」とした。

(asahi.com)

「する」の動詞らしさという点と関連して、「とする」の「と」と「する」の間の緊密度について述べると、その間に他の要素を生起させることが可能である¹³⁾。

- (9) 巨大地震によって発生が予測されるゆっくりとした揺れ「長周期地震動」で、高層ビルなどが現行想定以上の揺れエネルギーを受け、大きく損傷する恐れがあるとして、土木学会と日本建築学会は20日、こうした建築の耐震性見直しを求める共同提言を発表した。個別の建物ごとに安全性を検討し、必要に応じて補強することが望ましいなどもしている。
大都市を中心に波紋を広げそうだ。 (asahi.com)

このことは、「とする」の「と」と「する」がそれぞれ、独立性を保っていることを意味する。

以上の観察をまとめると、このタイプ1の「とする」構文は、まず使用されるテキストのタイプがある程度制限されていることが分かった。また(今後更なる考察の必要があるが)引用文は、ある程度の制限はあるが「判断の階層」と「発話態度の階層」の一部の意味を表すことが可能である。

そして、動詞「する」は他の一般的な動詞同様、タ形・テイル形をとることができ、「と」と「する」の間に別の要素を挿入することが可能であった。

3.2 タイプ2

次に、(2)のようなタイプの「とする」構文を観察する。

- (10) まず、10人の標本抽出を何回もくり返し、そのつど標本での平均値を記録していったとする。すると、その平均値は、母集団の平均(母平均)のまわりにある分布をする。 (考)
- (11) たとえば、電子に光を当てて、電子の位置を調べるとする。だが、電子はあまりにも小さいので、もし、光の波長が赤外線のように長いと、光は電子を通り過ぎてしまい、電子の正確な位置はわからない。

(『哲学的な何か、あと科学とか』 飲茶)

以下では、タイプ1の「とする」構文との間に、このタイプ2を独立した1つの用法として扱うだけの差異が存在することを示す。

(i) テキストタイプ

まず、この用法の「とする」構文が出現するテキストタイプについて実例を見ていくと、タイプ1では出現する環境が新聞へと大きく偏っていたものが、この

タイプになるとそのような偏りがなくなっていることが分かる。このタイプ2の「とする」構文は、新書・小説等様々な文体の文章において見られた。つまり、このタイプ2の「とする」構文はテキストタイプの制限から開放されているということになる。

(ii) 引用文にどれだけ表現可能か

次に引用文の性質を見ていくことにする。このタイプの「とする」構文の引用文は、「命題の階層」の意味を表わす形式しか表現できないというのが本稿の主張である。

実際に例を検討していく。すると、現にこのタイプの「とする」構文の引用文には（「発話態度の階層」はもちろん）「判断の階層」の意味を表す形式が生起できないことが分かる（この点において「引用文」という用語は適切ではないかもしれないが、便宜上、本稿ではこの用語を使用する）。

(10['])* 10人の標本抽出を何回もくり返し、そのつど標本での平均値を記録していったらうとする。

(11['])* たとえば、電子に光を当てて、電子の位置を調べるべきだとする。

以上の検証から、タイプ2の「とする」構文の引用文には「判断の階層」に位置する形式の生起が困難であることが分かる¹⁴⁾。

(iii) 「する」の動詞らしさ

次に、このタイプの「とする」構文における「する」の動詞としての性質について観察したい。

まず動詞の変化について見てみると、先程と同様に、タ形・テイル形への変化は可能であるように思える。

(10^{''}) 10人の標本抽出を何回もくり返し、そのつど標本での平均値を記録していったとした。

(11^{''}) (本研究では) 計算を簡単にするために、コインを10回投げて検定を行うものとしている。

しかし、「する」の動作主は先ほどと異なり、統語的には生起困難であるように思える¹⁵⁾。

(10^{'''})* 私がまず、10人の標本抽出を何回もくり返し、そのつど標本での平

均値を記録していったとする。

(11'')* 私が計算を簡単にするために、コインを10回投げて検定を行うものとする。

次に「とする」の緊密度について考えてみよう。これについては、「と」と「する」の間に他の形式が入った例は現段階では見つかっていない。作例してみると、容認度は下がるように思える。

(10''')?? まず、10人の標本抽出を何回もくり返し、そのつど標本での平均値を記録していったともする。

(11''')?? 計算を簡単にするために、コインを10回投げて検定を行うものとさえする。

このことは、このタイプの「とする」構文における「とする」は、「と」と「する」の間の緊密度がタイプ1のそれと比べて増しており、既に「と」と「する」がそれぞれ独立性を失いつつあることを意味していると言うことができる。

以上の観察をまとめる。まず、このタイプの「とする」構文にはテキストタイプの制約が見られなかった。また、引用文を見てみると、「命題の階層」の意味しか表すことができなかった。そして、「する」の動詞らしさを見てみると、「する」自体はタ形・テイル形をとるものの、統語的には動作主が生起できず、更には「と」と「する」の間には他の要素を挿入することができなかった。このように、このタイプ2の「とする」構文は、出現するテキストタイプ、動作主の生起、「と」と「する」の間の緊密度といった点でタイプ1と異なるのである。

3.3 タイプ3

別の「とする」構文を見ていくことにしよう。(3)を始め次のものがそれである。

(12) 私たちが論理的な判断をしようとしたときに、いつも推論スキーマにあてはめて考えるとは限らない。 (考)

(13) 私が無理に考えようとしていることは、新しい物質が生まれると期待して、力任せに掻き混ぜる行為に似ている。

(『少し変わった子あります』／森博嗣)

それでは、これまで同様、以下においてこのタイプの「とする」構文の特徴を考えていくことにしよう。

(i) テキストタイプ

この用法の場合、テキストタイプに偏りは無い。新聞、新書、小説、全てのテキストに出現する。つまり、このタイプの「とする」構文も、先ほどのタイプ2と同様、テキストタイプの制限から開放されたものと捉えることができる。この点において、タイプ1の「とする」構文の性質とは異なるものであるということが分かる。

(ii) 引用文にどれだけ表現可能か

次に、このタイプの「とする」構文の引用文の性質を見ていく。

すると、上記の例からも明らかなように、このタイプの「とする」構文は常に「意志形+とする」という形であることが分かる。これは、引用文において再現できる形式に制限があるということを意味する。「(よ)う」によって表わされる意志とは「判断の階層」に位置する意味であるため、このタイプの引用文は「判断の階層」までの意味を表現し得るということになる。ただし、「判断の階層」の中でも意志形に限定されている点には注意が必要である。

なお、このタイプは先行研究において慣用表現とされたものであるが¹⁶⁾、それはおそらく、このような点(意志形に限定される点)に注目したためと推測される。

また、このタイプが、たまたまタイプ1の構文に意志形が現れたものではないことを示唆する現象として、「発話態度の階層」の意味を表わす表現の生起が困難であることが挙げられる。

(12') *私たちが論理的な判断をしましょうとしたときに、いつも推論スキーマにあてはめて考えるとは限らない。

このことから、このタイプの「とする」構文の引用文は、タイプ1ともタイプ2とも異なる性質のものであることが分かる。

また、上記の現象(「発話態度の階層」が生起できない現象)から思考動詞が述部に位置した時の引用構文との類似が想起される。例えば、「思う」を述部にとる引用構文には終助詞が生起できない。

(14)* 彼は「お腹が空いたよ」と思った。

ただし、思考動詞であっても、「発話態度の階層」の意味を表わす形式の一つである、終助詞「なあ」等の独り言であることを示す形式は生起可能であるので(14')、このタイプの「とする」構文を単純に思考動詞を述部とした引用構文の言い換えとすることはできない。よって「とする」構文の用法の一つとして、その独自性を探っていくべきであろう。

(14') 彼は「お腹が空いたなあ」と思った。

(iii) 「する」の動詞らしさ

次に、動詞「する」の動詞らしさについて見てみよう。

まず、「する」自体はタ形・テイル形へと変化できる((12)はタ形の例、(13)はテイル形の例)。

また、「する」の動作主に着目すると、このタイプのものは「する」の動作主が同定可能であることが分かる。(12)の動作主は「私たち」、(13)は「私」と言って良いだろう¹⁷⁾。このように、タイプ3の「する」は、動作主との対応を保っていると言えるのである。

次に「と」と「する」の緊密度について見ていこう。これはタイプ1と同様のことが言えそうである。実例を見ていくと、以下のように、「と」と「する」の間に他の要素が挿入された例を見つけることができる。

(15) しかし私は、この原因を積極的に追究しようとはしなかった。

恐ろしかったからだ。

(数)

ここまでの観察をまとめると、次のようになる。

まず、このタイプの「とする」構文が出現するテキストのタイプには特に制限は見られない。これは、タイプ1とは異なり、タイプ2とは共通する性質である。また、引用文については、その末尾が意志形に限定されていた。これが、このタイプの「とする」構文の最も大きな特徴と言えるだろう。最後に、動詞「する」の性質だが、「する」自体はタ形・テイル形をとり、動作主の特定も可能である。また、「と」と「する」の間に他の要素を挿入することもできる。これは、タイプ1と同様である。つまり、このタイプの「とする」構文は、出現するテキストタイプはタイプ2と似た側面を有しており、動詞「する」の性質（「と」と「する」

の緊密度も含む)はタイプ1と共通する側面を有していることになる。ただし、引用文に関しては、独自の性質を持っているのである。

3.4 その他

最後に、本稿では詳しく扱えないものの、「とする」に関わりのある形式を用いており、今後「とする」構文との関わりを明らかにしなければならないと思われる表現の例を挙げておく。

ここでは、2つのタイプのものを挙げる。

一つは、以下のように複合助詞的に用いられる「として」という形式である。

(16) 穏健に、身分にふさわしい望みだけを持って生きる人は篤実温厚の士として賞賛はされても、学者としては全く不向きである。 (数)

(17) 私たちがものを考えるというときに、あることがらを前提として何らかの結論を得ること、すなわち「推論」が、重要なはたらきをしている。 (考)

これらの「として」については、他の「とする」構文に比べると比較的盛んに議論がなされているようである¹⁸⁾。

もう一つは、「必要とする」といったタイプの動詞である。この動詞の発生過程と本稿の「とする」構文との関係も興味深い問題である。

(18) 人間が部屋を片付けるためには、エネルギーを必要とするが、それは、人間が、食物をとって体内で燃焼させた結果である。 (哲)

これらの表現についての考察は今後の課題としたい。

3.5 意味的な対応

ここまで、「とする」構文を、統語的特徴(と出現するテキストのタイプ)という観点から幾つかに分類してきた。以下では、この統語的な分類が、先行研究における意味的な側面からの指摘に対応していることを述べる。

3.5.1 タイプ1の「とする」構文

まずは例を再掲する。

(19) 海外のメディアでは、フィガロ紙は「日本はキレル? 伝統に亀裂が? 川

久保はそう言っているように見える」。スタイル・ドット・コムは「安倍晋三が新首相に選ばれ日本が微妙な転換期にある今、あの赤い丸に注目せざるを得ない」として、「彼女は自身が思う純粋な日本の美をあえて表明した」と評した。(=5)

- (20) 合併に伴う選挙で初当選した佐賀市の秀島敏行市長が今年1月、3町に合併の意欲を打診。3町側も「07年度のできるだけ早い時期に合併したい」とし、急ピッチで協議を重ねてきた。(=6)

既に3.1において述べたように、このタイプ1の「とする」構文は『「とする』は『と言う』のような発話の引用の意味と『「と思う』のような思考の引用の意味を表わす、ということが予測される」と指摘されたものに対応すると言える¹⁹⁾。

3.5.2 タイプ2の「とする」構文

これも例を再掲する。

- (21) 孤独を増幅させたい人間が、あの店に通う道理なのかもしれない、と私は考えた。(注：孤独は)他人の存在との対比によって顕れるものだとする荒木の仮説を裏づける、あるいはそれを実証する実験装置ではないだろうか。(=10)

- (22) たとえば、電子に光を当てて、電子の位置を調べるとする。だが、電子はあまりにも小さいので、もし、光の波長が赤外線のように長いと、光は電子を通り過ぎてしまい、電子の正確な位置はわからない。(=11)

このタイプが表す意味は、先行研究が「仮定条件」と呼ぶものであると言えよう。つまり、統語的な特徴からタイプ2へと分類した「とする」構文は、「仮定条件」と呼ばれる意味に対応しているのである。

なお、例からも分かるように「とする」の「する」が無標であっても(つまり、「とすれば」「としたら」「とするなら」等の有標の形をとらなくても)、「仮定」や「条件」に近い意味を表わすことができる²⁰⁾。

3.5.3 タイプ3の「とする」構文

このタイプの例には以下のようなものがあった。

- (23) 私たちが論理的な判断をしようとしたときに、いつも推論スキーマにあてはめて考えるとは限らない。(=12)

- (24) 私が無理に考えようとしていることは、新しい物質が生まれると期待して、力任せに掻き混ぜる行為に似ている。 (=13)

このタイプは、先行研究で「近未来」と呼ばれた意味を表すものに対応していると言えるだろう。

ところで、このタイプの「とする」構文には若干の拡張例が見られるようである。上記の(23)(24)(= (12)、(13))の例を見ていると、確かに「近未来」とでも呼ぶべき意味を表していると言えなくはないが、それでもまだ、「話し手の意志」といった側面が無いわけでもない。しかし、次の例はどうだろうか。

- (25) 話題は、彼女の母親が三ヶ月まえに死んだときのこと。急に具合が悪くなり入院をした。その一週間後までは、いつものとおりができた。ところが、医者から危篤の知らせがあつて、病院へ駆けつけると、もう心拍が止まろうとしているところだった、という内容である。 (少)

- (26) 銀河はめぐって、そろそろ天頂からしりぞこうとしているようだった。
(『光ってみえるもの、あれは』川上弘美)

これらは既に、「する」の動作主が誰かを問うのは困難であり、それと同時に話し手の意志といった意味が後退し、より一層「近未来」的な意味へと近づいている例だと言えよう。更に、以下のような例になると、それがより明らかである。

- (27) 岩が今にも崖から落ちようとしている。

これを「岩」が自らの意志によって落ちようとしているという解釈は不自然であろう。それは、「わざと」等の表現との共起が不自然であることから分かる。

- (28)??岩がわざと (今にも) 崖から落ちようとしている。

このように、タイプ3の「とする」構文は話し手の「意志」と「近未来」的な意味とが混在したものから、純粹に「近未来」的な意味を表すものまで、様々な段階のものが存在する。この現象についての更なる考察は今後の課題としたい。

4. おわりに

以上、引用構文の主節述語が「する」という動詞である表現について考察を行ってきた。具体的には、統語の特徴や出現するテキストタイプといった観点から、様々なタイプの「とする」構文へと分類していった。その結果、その統語的な分

類がそれぞれ、先行研究において指摘されていた「とする」構文の様々な意味へと対応していることが明らかになった。

とは言え、本稿は「とする」構文についての考察のほんの導入部分にすぎない。詳細についての考察は今後の課題である。

註

- 1) 本稿は「第1回 博報『ことばと文化・教育』研究助成金：助成金番号 05-B-0073、『標準語』の多様性」(代表：岡田祥平)の研究成果の一部である。
- 2) 三上章『日本語の構文』(くろしお出版、1963年)、『構文の研究』(くろしお出版、2000年)、益岡隆志「日本語における条件形式の分化」益岡隆志(編)『条件表現の対照』(くろしお出版、2006年)。
- 3) 『構文の研究』、p. 209。
- 4) 『日本語の構文』、pp. 128-129。
- 5) 『条件表現の対照』、p. 42。
- 6) 『条件表現の対照』、p. 42。
- 7) このタイプの「とする」構文については、藤田保幸「引用形式『～トスル』の表現性」『国語語彙史の研究』20(和泉書院、2001年)が詳細な分析を行っている。
- 8) テキストタイプは「統語的」な特徴とは言えないが、タイプ分けをする際、興味深い現象を示すので取り上げることにした。
- 9) 今回の調査では、小説・新書・新聞を調べた。また、藤田保幸「引用形式『～トスル』の表現性」(前掲)は、このタイプの「とする」構文について考察したものと考えられるが、そこに挙がっている例も新聞のものがその大部分を占めている。新聞以外の出典元は、鹿野政直『近代日本の民俗学』、宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(下)』である。
- 10) これらの階層に関する用語は、益岡隆志「文の意味的階層構造」『日本言語学会夏季講座2004Seminar Handbook』に従う。また、「一般事態の階層」「個別事態の階層」を一括して「命題の階層」、「判断の階層」「発話態度の階層」を一括して「モダリティの階層」と呼ぶこともある。
- 11) ただし、この現象については藤田保幸「引用形式『～トスル』の表現性」(前掲)において、このタイプの「とする」構文の引用文に現れる表現はもっぱら「判断」を述べるものであるとし、「形の上では希望・意志の文や命令の文であっても、主体の思いの表出や他者への働きかけの意味は著しくなく(p. 279)」という指摘が

なされている。この現象についての更なる考察は今後の課題としたい。

- 12) ただし終助詞の生起は困難であるため典型的な引用構文とは言えない。
- 13) 藤田保幸「引用形式『～トスル』の表現性」(前掲)では、「と」と「する」の間に主語が生起可能であることも指摘されている。
- 14) 同じ「命題の階層」であっても「一般事態の階層」なのか「個別事態の階層」なのかという問題が残るが、本稿ではそこまで踏み込まない。
- 15) ただし、意味的には「する」の動作主は話者(筆者)であると推測できる。
- 16) 『構文の研究』、『日本語の構文』参照。
- 17) このタイプの「と^トする」構文の「する」の動作主は「私」に限られるというわけではない。以下の例は、「世間の人々」といったような動作主が想定できる。
 - i) 福岡での事故以降、飲酒運転をなくそうとする動きが広がっている。悲惨な出来事を二度と起こさないよう、社会全体が重く受け止めるべきだ。(毎日新聞)
- 18) 例えば、藤田保幸「接続助詞的用法の『～トシテ』について」『滋賀大國文』41(2003年、滋賀大学)、馬小兵(1997)『『立場・資格』を表す『として』の用法について』『筑波日本語研究』2(1997年、筑波大学)。
- 19) ただし、単に「言う」「思う」の言い換えだと捉えるわけにはいかないことが藤田保幸「引用形式『～トスル』の表現性」(前掲)でも指摘されている。
- 20) また、このタイプの「と^トする」構文は、次のように「ことにする」という表現と非常に近い意味を表すことがある。この点については、稿を改めて述べることにする。
 - ii) いま、あるギャンブラーが使ったコインが手にはいった(と^トする/ことにする)。彼はこのコインを使って大もうけしたそうだ。もしかすると、表か裏のどちらかが出やすいインチキコインかもしれない。そこで、ためしに何回か投げてみてその記録をとり、偏りがないかどうかを判定しようということになる。ここで使われるのが「検定」である。(考:原文は「と^トする」)

<キーワード>「と^トする」構文、引用構文、仮定条件、近未来

A note on "*tosuru*" construction

Takanori IWAO

This paper intends to show perspectives in classification of "*tosuru*" construction. "*Tosuru*" construction can be classified into four types by three syntactic (and textual) perspectives; 1) difference of text type where "*tosuru*" construction is used; 2) property of quotative clause; 3) property of "*suru*" verb.

Four types of "*tosuru*" construction classified by these perspectives correspond to semantic properties of the construction proposed in other researches.